

# 学習形態をめぐる蓄積と融合 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の求め

千葉大学名誉教授 <sup>あまがさ</sup>天笠 <sup>しげる</sup>茂

## 1 100年の蓄積：学習形態をめぐる実践

グループに分けて少人数による学習を進める。今では当たり前となった授業風景である。歴史を遡ってみると、1912（大正元）年、大正期から昭和初頭にかけてのオピニオンリーダーの一人であった及川平治が『分団式動的教育法』を著わしている。

一斉授業の中で教育内容や子供の学習の状況に応じて、「全体」「グループ」「個別」と学習集団を柔軟に編成し、能動的に学習する力や自学自習する力を育てる教育方法の提唱である。我が国の授業をめぐる学習形態に関する実践的研究の端緒となる一書である。

以来、教室における一斉授業への工夫や改善を図る取組として振り返ってみれば、学習形態に着目して、様々な角度から実践が試みられてきた。導入・展開・まとめという授業の過程に沿って、教材の提示や発問などとともに学習形態を示す。さらには、学習空間の設計と活用をめぐる試みも加えて、学習形態をめぐる試みは蓄積が図られてきた。

個に応じた指導とかTTによる指導体制の工夫のもとに、内容や課題によって形態を柔軟に対応させていく取組が盛んになされた時代もあり、今に引き継がれている。

しかし、小グループによる学習が授業者の意図やねらいにどれほど迫れたか、時に疑問符がつくような授業に出会うこともある。指導案どおりの導入に始まり、少人数のグループごとへと展開しつつも、コミュニケーションがなかなか成り立たず、時間が経過してしまう授業に出会うことも時にある。

導入段階での課題の共有が十分でなかったかもしれない。そもそも、子供たちにとって話し合う課題が難しすぎたり、関心から遠いものであったかもしれない。あるいは、話し合うことに慣れていなかったり、グループ内の人間関係に問題があったかもしれない。

グループとか小集団といわれる少人数による学習においては、コミュニケーションとか対話が成り立ちのポイントとなることが少なくない。身に付けた知識や技能を定着させ、多面的で深い理解に至り、思考を深めていくには、教師と子供との対話とともに、子供相互の対話も欠かせない。

いずれにしてもこのような経過と蓄積のもとに一人一台の端末の登場があり、学習過程や学習形態に関わる実践的研究をめぐる、新たな局面が開かれようとしている。

## 2 「個別最適な学び」と一人一台の端末

「個別最適な学び」というキーワードのもとに、学習者に沿った個別的な学びを後押しする動きが顕著である。その一つが、中央教育審議会による「令和の日本型学校教育」（答申）（令和3年1月26日）である。

答申は、「個別最適な学び」の要件として、興味・関心に応じ、課題の設定、子供自身による情報の収集、整理、分析、まとめ、表現など、主体的に学習を最適にすることをあげ、学習者の視点による学びの実現を強調する。その上で、「個別最適な学び」の実現のためのツールとして一人一台の端末をあげる。

もっとも、一人一台の端末の登場は、教室

でなされる学習の実質的な成り立ちについて、学習形態面からとらえることを一層難しくしたと言えなくもない。学習形態面から見れば一斉に見えても、それぞれが個々に自らの課題に取り組み、個別に学習が進行していることもある。逆もあり、端末に向かう姿からは個々に学んでいるように見えても、実際には教師による一つの課題を、同一の時間に一斉に取り組んでいることもある。

このようなことから、学習形態に関わる実践的研究は意義を失ってしまったかもしれない。折しも、自らの問題意識のもとに学習課題を選択し、学ぶ時間も自ら調整し、学習の場も求めていく「個別最適な学び」のもとでは、学習形態に関わる知見はあまり必要としないことになるかもしれない。

しかし、「個別最適な学び」の求めは、新たな学びの関係づくりへの問いかけであることも押さえておきたい。

### 3 「個別最適な学び」と「協働的な学び」

「個別最適な学び」が孤立した学びに陥らないようにと説いたのも「令和の日本型学校教育」（答申）である。「答申」は、「個別最適な学び」とともに「協働的な学び」の必要性を説き、両者の一体的充実を求めている。

個別に学習を進めるとともに、協働による学びを求めていく。すなわち、学び合うこと、感覚を働かせ互いに刺激し合うこと、など「協働的な学び」も欠かせないという。学習者が学び合い、お互いの違いを認め合い、相乗効果を生み出す教育の充実を重視するとして「協働的な学び」の必要性を強調する。

その意味で、学習形態に関わる実践的研究も、学びを核に学習者相互の関係をつくるという観点から、相応の意義を有し、その発展的な展開が問われるということになる。

しかし、学習形態をめぐるこれまでの実践

や研究が、大集団⇒中集団⇒小集団⇒個別とか、習熟度別学習のための編成の仕方とか、とかく形態や組合せや人数的規模などに関心を置き、学習者相互の関係づくりを疎かにしてきたところはなかったか。改めて、学習形態に関わるテーマが、学習者相互の関係を成り立たせる働きかけや環境づくりにあることを確認しておきたい。

「個別最適な学び」は「協働的な学び」とともにあることによって、また、一体的に発展を図ることによって、より確かなものとなる。

その点を踏まえ、学習形態に関わる実践及び研究も、一単位時間の学習過程の工夫にとどめず、単元・題材に向けて指導計画の作成や開発へと広げていくことが大切である。

また、学級や学年を前提に学びの集団の編成や形態の工夫に多くを注いできたこれまでに対し、学級や学年を越える広がりのある視野が問われることになる。すなわち、学級を越えて学年全体を、学年を越えて学校全体を、さらには、学校を越えて地域をとらえる視野が「協働的な学び」を支えることになる。

いずれにしても、これまでの積み重ねと新たな試みの融合をめざす令和の教育改革にあつて、学習形態に関わる取組は、これからの授業や学校の在り方を探る試金石となるものであり、その発展的な展開に注目したい。

#### 【参考文献】

- ・新井郁男・天笠 茂編『学習の総合化をめざすティーム・ティーチング事典』教育出版 1999年
- ・天笠 茂「『個に応じる指導』と『個別最適化された学び』」『千葉教育』令和2年度萩663号 2020年9月
- ・天笠 茂「令和時代の学び－『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的充実－」『教育研究』2021年8月号